

第		17		回						
住	民	の	自	治	-	統	治	研	究	会
	ご		あ		ん		な		い	

地域課題と市民活動団体・行政の関係

-西成現地研究会から見えてきたもの-

と き:2013年4月27日(土)午後2時~4時 (開始時刻に注意を)

ところ:大阪自治体問題研究所会議室

この間取組んできた西成・釜ヶ崎地域の現地研究会のまとめの議論を行い、今後の課題を考えます。

前回 2013.3.9 研究会の報告

現地研究会「ココルーム」上田さんをたずねて-芸術と西成のまちづくり

西成・釜ヶ崎をテーマに現地研究会を継続し中間総括で、地域の課題が顕在化し、課題解決に向けた地域の合意形成の可能性が高いなどの議論を行ったが、前回の釜ヶ崎支援機構に続いて、ココルームの上田さんに話をうかがい、各団体の取組みの対象と手法の相違、例えば、支援機構ではホームレス支援、ココルームでは一人一人の個性を尊重し、社会生活を営む上でのコミュニケーション能力(聴く力、表現力)を養い、自律を促す、それは芸術の原点回帰であり、そのために多人数や広い領域を対象とせず、一対一の関係を基礎にした取組みである。この相違は西成・釜ヶ崎の団体の多様さを示すものであると同時に、一時的な参加者に問題の安易な理解を戒めるものである。今回の研究会は詩人上田さんの個人的な来歴や視点を投影したものになった。

1)詩人の生き方、なりわいが活動

(1)詩人で生活することは困難。一般的には生活と共にあって人生を豊かにするものされる。上田さんの場合、サロンを作り、マネージメントができる人を養成するなどの経験を持つ。さらに、詩を仕事にすることを助言できなかったつらい経験を経て、詩を仕事にする覚悟をする。(2)詩人の仕事⇒人生をあきらめない、命の唯一性、一回性の喜びを言葉や態度として差し出す仕方を伝えること。(3)2003年フェスティバルゲートに入居。ゲートでは大阪市が現代アート推進のため事業を展開。これを契機に公共性について考える。⇒その場所を色々な人が、情報交換し一緒にしゃべり、人間関係をつくる豊かな出会いの場であるカフェとする。(4)基本⇒出会った人に合わせて活動し、表現を通じ関わる。アート目指す人は社会と折り合えず孤立している。

∴アート表現により社会につながり働き方を創造していく。

2)釜ヶ崎という場と言葉・釜ヶ崎芸術大学

(1)フェスティバルゲートで活動をはじめ、近隣のホームレス問題に関心を寄せる。ビッグイシューを応援するイベントを企画し、ホームレスの人に出会い、一人一人の状況があることを知った。(2)2008年釜ヶ崎に移動するがスタッフが全員退職。6月には15年ぶりに暴動が起こる。リーマンショック、派遣村、無縁社会と続く流れの中で日本が釜ヶ崎化した。2009年メディアセンター立ち上げ時、商店主が釜ヶ崎という名称を嫌うことを知る。立場によって新今宮、萩之茶屋を求めている。(3)釜ヶ崎芸術大学⇒ココルームの小さな場からまちでつながるために始めた。まちのおじいちゃんたちの参加が多い。

3)西成特区構想・釜ヶ崎のまち再生フォーラム・(仮称)萩之茶屋まちづくり拡大会議・文化行政

(1)西成特区構想⇒構想が突然降ってわいてきた。色々な意見がせめぎ合っているが、当事者が声を上げること、施策が定まっていくなかで、地べたで生きている人のことを届けられるかが問われている。(2)再生フォーラム⇒まちづくりの個人参加のプラットホームとして地元の活動に目を注いでいる。(3)拡大会議⇒町会、NPO、行政など微妙な関係にあるが、町会や運動団体が定期的に集う場を作ったのは貴重で対話の経験が積み重ねられてきた。(4)文化行政⇒行政との10年の付き合いの中で、今の大阪市では文化事業が育っていかない。調査し活動を評価して政策を高めていく取組みがない。2007年からアーツカウンシルの制度化を要望してきた。

5)今後のまちづくりの方向

アーティストが出会える仕組みを作り、まちの人が作った作品を商品とするなど、まちとアートを掛け合わせたい。

当研究会は自主研究会ですので、参加者には資料代1回=500円の負担の協力をお願いしています。

主催=住民の自治・統治研究会 (06-6354-7220)